

## 菊池寛論——歴史小説と自意識

山本芳明

### 1

菊池寛とはどのような文学者なのだろうか。この問いに対する答は簡単ではない。菊池が劇作家から小説家へ転身したかと思えば、通俗小説に進出する一方で〈私小説〉と分類されるような啓吉ものを執筆するなど、文学的に幅広い活動をしてきたことも大きな要因である。また、彼の活動が文学者の枠を越えていることも大いに関係しているだろう。大正十二年一月に「文藝春秋」を創刊したことによって、菊池は有能な編集者・ジャーナリスト・ビジネスマンとしての才能を発揮することになった。後には大日本映画製作株式会社の社長にもなっている。また、大正十年には相互扶助を目的とした小説家協会を結成するなど、社会活動にも熱心だった。

しかし、菊池の広範な活動が問題の核心ではない。核心にあるのは菊池自身の言説の矛盾、あるいは一貫性のなさである。菊池はそのときどきで述べていることが大きく異なっていた。しかも、菊池が急逝したことによって、菊池

自身による言説の再編集がなかったために、矛盾—貫性の欠如は放置されたままになっているのである。そしてこの問題は十分に追求されてこなかった。

例えば、『日本近代文学大事典 机上版』（講談社 昭59・10刊）で、菊池は「伝統的な美文意識と審美的な描写主義を否定し、作家の文人趣味を批判してきた。作品の内容的価値を重んじ、『生活第一、芸術第二』を信条としてきた文学者である。合理と自由を愛するヒューマニストであった」（浅井清）と説明されている。

この説明は、菊池が昭和二十三年三月六日に死ぬ直前に作成した自己像を忠実にふまえたものといっているであろう。菊池は吉川英治の名を借りて執筆した新潮文庫『藤十郎の恋』<sup>(1)</sup>（昭23・3・20刊 引用は『藤十郎の恋・恩讐の彼方に』平21・10・30刊の54刷によった）の「解説」でこう述べていた。

この集には、菊池氏の初期の作品中、歴史物の佳作が悉く収められている。これらの作品を見ても、菊池氏が、リベラリストとして、その創作によって封建思想の打破に努めていたことがハッキリするであろう。

これらの作品のテーマは、現代においてはあまりに珍しくはないかもしれない。しかし、それは菊池氏以後の多くの歴史物の作家が、その影響を受けて、こうしたテーマが一般的に普及したからである。三十年前においては、これらのテーマはすべて菊池氏独特の異色ある思い付きであったのである。

菊池は「解説」の最後を「戦いに敗れた今日、改めて封建思想の打破が叫ばなければならないほど、菊池氏としては、残念至極なことと思っているであろう。」と締めくくっている。

菊池像として読者にアピールされているのは「封建思想の打破」を唱え続けた「リベラリスト」であり、浅井のいう「合理と自由を愛するヒューマニスト」ということになるだろう。作品解説の方でも、その点を強調していた。

「忠直卿行状記」（「中央公論」大7・9）については「封建主義が、民衆を不幸にしたと同時に、その君主達の間人

生活をゆがめた事実を描いた」と、『恩讐の彼方に』（『中央公論』大8・1）については「早くも敵打を否定した作品である。」と指摘していた。

しかし、この自己解説を鵜呑みにすることはできない。「解説」のねらいが公職追放をうけた菊池の名誉回復や社会復帰にあることはすぐに見て取れる。戦中の陸軍の暴走を許した原因を、日本が近代化や民主化に失敗して、封建遺制が残ったためとする、戦後の思潮に即した発言であることは明らかだろう。有能なジャーナリストである菊池は新たに浮上してきた言説を利用して、自己像をリニューアルしようとしたのである。

菊池が利用した言説は、昭和二年から十二年にかけて行われた日本資本主義論争で講座派が主張した歴史観<sup>(3)</sup>に基づいたものである。菊池はそれを先取りしていたと主張していることになる。マルクス主義思想が定着していなかった大正中期に、戦後期に一般化した枠組に則ったテーマで小説を書くことはほぼ不可能である。

また、「解説」で、近代的な合理主義者、「リベラリスト」であることを強調していた菊池だが、戦中の言説は一八〇度違っていた。菊池は「軍事上の大勝だけで、我々は安心してゐてはならない。それに依つて、必勝の信念を固めると共に、思想戦経済戦に於ても、完勝を期せねばならない。政府の指示に従ひ、その言説を信じ、その統制に服し、各自の全力を尽すことが、大切である。思想戦や経済戦に於て、不覚を取つては皇軍の大勝に対して、申訳が立たないと思ふ。」（『話の屑籠』『文藝春秋』昭17・3）と述べていた。

戦況が悪化すると、「いかに戦争が苛烈になつても、国民の精神的団結が破れなければ、必勝は疑なしである。古今東西の歴史を見ても、敗戦には必ず、敗者の方に精神的な欠陥弱点が指摘されてゐる。それは、現代の科学戦物質戦に於ても同じ事である。国民全部が大死一番して戦はゞ絶対負けることはない。」（『其心記』『文藝春秋』昭19・7）と述べていた。

敗戦後は一変する。「今度の戦争を始めたのは、ごく少数の軍閥に相違ないが、さうした少数の軍閥に、兵馬の権を壟断せしめたことは、国民全体の責任である。国民が、もつと政治に関心を持ち、立憲政治の確立を念とし、政党内閣制だけでも、堅持してゐたならば、恐らく今度のやうな大悲運を招かなくとも済んでゐたであらう。日本人は、その点に於て情けない国民である」（『其心記』「文芸春秋」昭20・12）。

菊池は「自由主義」を『『良心と理性とに依つて行動すること』（『自由主義の意味』「富士」昭20・11）だと定義し、「その主義が彼の良心と理性とに満足を与へるならば、よろこんで如何なる主義をも受け入れるだらう。」と補足していた。この説明からすれば、状況に依じて出処進退をどんなに変更しても、主観的には「自由主義者」であることになつてしまふ。

菊池の無責任な変身ぶりに驚きを禁じ得ない。彼は読者が自分の発言を忘れていることを当てにしていたのだろうか。菊池の言説には、こうした他者の反応を考慮しない、いわば、臆面もない矛盾や一貫性の欠如が散見されるのである。

例えば、有名な「生活第一、芸術第二」も素直に信用するのは危険すぎる。菊池が洋行することを思い立ち口にしたのは、大正十年の「秋から暮頃」（『洋行はする！』「時事新報」大11・5・31）だが、その理由は「自分の現在の生活を変へる」（『生活革新の爲めの洋行』「新潮」大11・1）ためだった。変えなくてはならない「現在の生活」とは次のようなものだった。「文壇へ出た当時は、堅実な、つましい生活をしてゐたのだが、それが、金がとれるに従つて、段々放縦になり、贅沢になり、所謂ブルジョア式になつて来た。金がとれる結果、さういふ生活になるのは、已むを得ないとしておく。さういふ生活が面白くなつて、さういふ生活を続けるために、金をとらうといふ心持が出かゝつて来たので、それが自分自身、危険だと思つたから、さういふ生活を打砕くために外遊を決心したのである」

(同前)。

しかし、先立つものはカネだった。「一昨年あたりから儲けた金は大抵使ってしまった」(同前)からだ。「全集を出したり、通俗小説を書いたり、その他二三の方面で算段」(同前)するつもりだったらしいが、それに失敗したためなのか、あるいは「興味」を失って「只、億劫に感じるばかり」(「洋行はする!」)になったためなのか、菊池は、結局、洋行しなかった。

「生活革新」に失敗した菊池が「浪費家」(「わが妻を語る」)「主婦之友」昭11・6)となったのも必然ということになる。しかも、「家とか、家財道具、そんなものには、ちつとも興味がなく、たゞムダ使ひが好きなのである。金を溜めようと云ふやうな気は少しもない。だから、僕個人としては、一冊の貯金帳さへない。」(同前)という徹底したものだ<sup>(4)</sup>。にもかかわらず、「生活第一」の文学者という神話が維持されていたのは、菊池自身が神話に即した自己像を流通させていたからだろう。

文壇的に世に出ても、私は外交記者として、神妙に出精したつもりである。私は原稿が売れ出したからと云つて、すぐ怠けるやうな事はしなかった。やはり月々の定収入を生活費の基礎としようと思つてゐた。

私は貧乏な家に生れ、学生時代をずうツと苦労しただけに、世に出るからの生活振りは堅実そのものであつたと思ふ。私は収入の少ない時は、それに応じてつゝましくしたと思ふ。だから、私は今まで借金をしたことはなく、原稿料の前借りも一度だつてしたことがない。(「世に出るまで」「青年」昭12・1)

発表時期は大変近接している。しかし、菊池自身は矛盾や一貫性の欠如が生じていることを気にしていなかったと思われぬ。思わず、自意識の欠如を疑いたくなるが、いずれにせよ、その結果、菊池寛の文学的・文化的・経済的・社会的な諸活動を連続したものとして捉えることは一筋縄ではいかない難しい作業となっている。菊池の言説

には大小さまざまな亀裂や分断、飛躍や矛盾などがいたる所に存在しているのである。それは自作解説についても同様だ<sup>(5)</sup>った。

菊池は大正期に発表した自作解説で、「封建思想の打破」がテーマなどと述べたことはなかった。例えば、「自信がなくて意外にも高評であつた『忠直卿行状記』（『新潮』大8・1）では「忠直卿行状記」の「ヒントは世間見ずの現代の貴族の子弟の性格から得たもので、中の事件はまるで考へ出した事で、史実には少しも拠つて居ない。」と語っている。

「小説論各論 歴史小説論」（『文芸講座』大13・9〜11）では、「私が実生活で得たテーマを歴史小説に書いた場合」としてこう説明していた。「私の処女作である『恩を返す話』もさうである。私は、人から大恩を受けた。その大恩について悩んだ。その悩みから、生れた作品が『恩を返す話』である。『忠直卿行状記』もどちらかと云へば、実生活から題材を得た。私は、貴族の息子を一人知つてゐた。周囲の人の阿諛追従に依り、人生に対する正当なる認識を妨げられてゐるこの貴族の息子の存在から、私は『忠直卿行状記』を考へつた。従つて、忠直卿は私のテーマを小説化する道具である。忠直卿でも誰でもよかつたのである」。

新潮文庫の「解説」は、戦後の状況に対応させたものでしかない。同様に、大正期の言説も単純に信用してしまふのは、問題である。第一段階として、作品そのものの構造を確認することが重要だ。そして、菊池が語らなかつたことは何かを確かめたうえで、菊池の作品世界の特質を見極めていく必要があるだろう。本稿では、その試みとして「恩を返す話」と「忠直卿行状記」を考察してみたい。

「恩を返す話」(『大学評論』大6・3)は、新潮文庫でも巻頭に配されていたが、菊池の最初の単行本『恩を返す話』(春陽堂 大7・8刊)の巻頭を飾り、書名となった作品である。菊池にとって重要な作品であることがわかる。単行本には「恩人なる亡きN夫人にさゝぐ」という献辞があるように、世話になった成瀬正一の母峰子への思いが込められていた。また、「後序」に芥川龍之介がこの作品を「ゼラール中尉」(『新公論』大7・1)などとともに「過分に賞めて呉れた事が、どれほど自分の自信を培ったか分らない。」とあるように、戯曲家から小説家へと変身しようとした際のスプリング・ボードともなっていた。

新潮文庫の「解説」にはこうあった。「いわゆる『大恩は謝せず』の思想である。恐らく、菊池氏が学生時代の恩人に対する心持から生れた作品であろう。恩返しを考えると、恩人の不幸を待っている気持だと云う皮肉な思い付きである。が、菊池氏はかつて筆者に、『自分は受けた恩は悉く返した』と、語ったことがあるから、菊池氏は、その意に反して、恩人の不幸を見なければならなかったのであろう」。

この「皮肉な思い付き」の内容を説明してくれるのは、この作品の姉妹編ともいうべき「大島が出来る話」(『新潮』大7・6)である。「大島が出来る話」は菊池の恩に対する葛藤、恩人の死に直面した動揺などが菊池自身をモデルとした主人公を通して描かれた現代小説である。なお、「大島が出来る話」は『心の王国』(新潮社 大8・1刊)の巻頭に置かれた。このことから菊池が成瀬峰子に抱いた思いの深さがわかってくる<sup>(6)</sup>。

菊池は「皮肉な思い付き」を、主人公讓吉にこう説明させていた。「実際夫人は彼に取って、此数年来生活の唯一

の保証者であった。彼と夫人との関係は『与へられる』と云ふ関係に尽きて居た。彼は近藤夫人に対して、何等の恩返しもしなかつた。たゞ夫人の恩恵を、真正面から受け、夫それに対して純な感謝の情を、何時迄も懐いて居りたいと思つて居た。恩返しを試むる事は、或意味に於て恩を受けた者の、利己エゴイスト的な要求に基づいて居る事が多かつた。恩を受けて居る事と、夫に対して感謝して居る事とに依つて、其処に温い人情関係が作られて居る。若し恩を返してしまつたら、其処に对等の関係が生じて、以前の人情関係は、消滅してしまふのだ。また恩を返すと云ふ事は、恩人に何等かの事件、災害、不幸が起る事を、前提としなければならなかつた。従つて、恩返し恩返しの機会を待つ事は、恩人に何等かの事変が起るのを待つのと、余り距たつた心持ではないと、彼は思つて居た。

讓吉は「恩返しなども、少しく念頭に置かなかつた。支那の書物にある『大恩は謝せず』などと云ふのと、殆ど同じ心持であつた。只何時迄も、近藤夫人に対し、純な強い感謝の心を懐いて居たい」と総括している。

もっともらしい理屈が述べられている。だが、讓吉を支えた成語、「支那の書物にある『大恩は謝せず』」というのが曲者である。というのも、辞書類にあるのは、「大恩は報せず」である。「小さな恩義は負い目に感ずるが、大きすぎる恩は気づかずにかえつて平気である」（広辞苑）の意である。『精選版 日本国語大辞典』の用例は仮名草子の『狗張子』（一六九二）だつた。こちらの方が人間の陥りがちな心理を鋭く表現していると考えられる。

讓吉は自分の葛藤を解消するための理屈をむりやり作り出して、それをすでに定着した成語であるかのようにもつともらしく説明していたのである。そうしなければ、讓吉は「恩返し」をしたくても、経済力がないために、「恩返し」ができないジレンマに苦しんでしまう。それを回避するための「大恩は謝せず」なのだ。讓吉の心理や心理操作がモデルの菊池自身のものだったとしたら、菊池は讓吉のようなジレンマを抱えていたことになる。

讓吉は「恩を返してしまつたら、其処に对等の関係が生じて」「温い人情関係」が消滅してしまうことを恐れてい

だが、それは「対等の関係」になりたいという欲望が存在することを意味していた。讓吉は、「恩返し」の機会が訪れることは「恩人に何等かの事件、災害、不幸が起る事」でもあると指摘していた。「恩返し」できたときには、「恩人」は対等な関係も維持できないほど、〈没落〉している可能性が大きいということである。このように言及する以上、讓吉は上下関係の大逆転、自己が圧倒的に優位な立場に立つことを密かに願望していたことになる。そうした「利己的な要求」を暴走させないための心理的なメカニズムが「大恩は謝せず」なのである。

つまり、菊池は権力関係を逆転して、恩人を支配したいという強い欲望を持っていたことになる。松岡讓は「時事新報」の記者をしていたころの菊池が「時たまその卑下が昂じて厭味にさへ響き、又始まつたと私達から非難される」ほど、「君のやうな謙虚も度が過ぎれば卑屈どころか悪徳だ」（『回想の久米・菊池』『漱石の印税帖』朝日新聞社昭30・8刊）といったことがあるほど「謙虚」だったと回想していた。こうした過剰な「謙虚」さの影に潜んでいたのが〈優越〉への欲求だったのではないだろうか。

新潮文庫の「解説」に「『自分は受けた恩は悉く返した』と、語ったことがあるから、菊池氏は、その意に反して、恩人の不幸を見なければならなかったのであろう。」とあるように、流行作家となり経済力を獲得し、メディアの大立て者となった菊池にとっては抑圧する必要のない欲望だった。だが、執筆時の菊池にとっては切実なテーマだったのである。二つの短篇集の巻頭に置かれた作品のテーマが「恩返し」だったことがその証しである。文学活動を始めたばかりの菊池は、先ほど、自意識の欠如を疑ってしまった菊池とは正反対の人物だったのである。

「大島が出来る話」では欲望を抑制することに成功した男の姿が描かれていた。「恩を返す話」では、戦場で命を救われた男が救ってくれた朋輩に頭があがらなくなる。それが嫌で、「恩を返」そうとするものの、彼の試みはことごとく失敗して、「死ぬ迄苦悶」する。「大恩は謝せず」を実践できなかった男の運命が描かれていた。

「恩を返す話」のプロットの特徴は、主人公が「恩を返」そうとして失敗する度に、恩人はより一層優位に、主人公はより一層劣位の立場に心理的に追いやられるプロセスが段階的に描かれているところにある。したがって、この作品にある種の心理的なシミュレーションゲームと考えることができる。

ゲームのプレイヤーとなるのは、「恩を返」す側が神山甚兵衛、恩人が佐原惣八郎である。「磊落な甚兵衛には、ツンと取り済した惣八郎が気に入らなかつた」うえに、彼は戦場で救われる以前に、惣八郎にすでに〈負け〉ていた。「三年前産土神うぶながみの奉納仕合」で「敗れ」ていたのである。甚兵衛は「今一度の手合せを願」ったにもかかわらず、「惣八郎は色々な口実で、それを避けた」。二人の仲が大猿の仲になったわけではないが、「甚兵衛は、一時の勝利の効果を永く保存しようとする惣八郎を、可なり含んで居て、何時かは目に物見せようと心掛けて居た」のだった。

したがって、島原の乱の戦場で惣八郎によって命を救われることで、甚兵衛は「自分の嫌な男を、一生、命の恩人として、持つて居る事は、如何に不快であるかを考へ」ざるを得なくなる。同時に、自分の失態が「噂」となって広まることを恐れた。そして、「考へ付いた」のが「この不快を取り除く第一の手段は早く恩返しをする事」、「惣八郎の危難を助けてやればよい、彼に受けた丈の恩を返してやればよい」ということだった。「恩返し」こそ「対等の関係」に復帰する唯一の方法なのである。

陣中にもどった甚兵衛の意表をついたのは、惣八郎が甚兵衛を救ったことを吹聴していなかったことだった。その事実によって甚兵衛は「二重に恩を着たやうな心がして、心苦しく」思った。「奉納仕合」から数えれば、三度目の〈負け〉ということになる。しかも、「報恩の機会」をうかがう甚兵衛にそのチャンスは訪れることはなかった。その後の戦いで、惣八郎が危機に陥ることはなかったのである。

島原の乱後、幕藩体制が安定し「泰平の日が始ま」っても、「甚兵衛は、戦中と同じやうな、緊張した心持で、報

恩の機会を狙った」。しかし、「惣八郎は無事息災」だった。そこで「自分で惣八郎を、危難に陥し入れる機会を作らうかとさへ考へる」。「然し夫には、彼の心に強い反対があつた」ため、実行に移さなかつた。もし、実行すれば、一種の代理ミュンヒハウゼン症候群<sup>(7)</sup>の世界が描かれたかもしれないなかつた。シミュレーションゲームとしてはここに大きな転換点があつた。「恩返し」に取りつかれているにもかかわらず、甚兵衛の選択はある意味で〈健全〉だった。あるいは、〈健全〉だったのは菊池の方かも知れない。

甚兵衛は惣八郎に対する劣等感を解消するために「泰平の日」にふさわしい戦略を模索する。最初に試みたのは「恩を受けたと云ふ事実を忘れよう」という戦略である。しかし、家中で「武辺の話が出る時は、必ず島原一揆」を持ち出されてしまう。甚兵衛は島原での経験談を語りざるを得なかつた。語れば「其度に彼は不快な記憶を新に」することになつた。戦略としての〈忘却〉は失敗に終つた。

しかも、惣八郎は甚兵衛を救つた際に倒した相手から奪つた「十字架<sup>クルス</sup>を鑄直した」「金の唐獅子の大きい金物」を目貫として「秘蔵の佩刀」に付けていた。「彼は自慢にして居るやう」で、「誰かに来歴を訊かれると」簡単に答えるだけだが、「得意らしい微笑<sup>えみか</sup>を洩した」。「傍で聴いて居る甚兵衛は、席に居た、まらぬ迄に赤面するのを常とした」。甚兵衛は〈記憶〉——トラウマが事あるごとに甦る状況に置かれていたのである。

次に、甚兵衛がとつた戦略は惣八郎と「昵懇」となることだつた。「成功したら、嫌な人間から恩を受けて居るのではなくして、昵懇の友人から、受けて居る事になる」と考えたのである。いわば、記憶を上書きしようとしたのである。「彼は稍<sup>やや</sup>夫に成功した」が、こうした心理的な操作では満足できなかった甚兵衛は積極的な行動に出る。「ある口実があつたのを機会に、家伝の菊一文字の短刀を惣八郎に贈らうとした。彼は自分の家に無くてはならぬ宝刀を、失ふ事に依つて、恩を幾分でも返したと云ふやうな、心持を得たいと思つたのである」。

しかし、「惣八郎は、真正面から、夫を拒絶した」。甚兵衛は、惣八郎が「故意に恩を返させまいとするのだ、彼は一生恩人としての高い位置を占めて、黙々の裡に、一生自分を見下ろさうとするのだ」と解釈した。そして「夫ならばよい、意地にも返して見せる、命を助けられたのだから、見事に助け返してやる」と決意する。最初の戦略に回帰したのである。

しかし、そうした機会が「泰平の日」に訪れることはなく、甚兵衛は焦燥に駆られて「一層惣八郎を打果して死なうか」と思うこともあったが、「夫は自分が、恩を返す能力のない事を自白するのと同じだ」と思って、実行はしなかった。いうまでもなく、ここにも大きな転換点があった。甚兵衛が〈暴力〉に訴えていれば、一種の犯罪小説となつた可能性がある。しかし、甚兵衛、あるいは菊池はあくまでも〈健全〉な選択をしたのである。

甚兵衛に絶好の機会が訪れたのは、「天草の騒動から、数へて二十六年」たった寛文三年、甚兵衛「四十六」歳、健康に不安を感じて、「是非為さなければならぬ報恩の一儀が、愈々心を悩した」ときだった。

惣八郎が「上意打」となり、その「仕手」に甚兵衛が選ばれたのである。甚兵衛は「永く自分を苦しめた、圧迫を今日こそ、地に擲つ事が出来る」と感じて、戦略を練った。「自分を犠牲に」して、惣八郎の命を救つたことを惣八郎に確実に認識させる必要があったからだ。そうしなければ、惣八郎に「恩を返した」ことにならないのだ。惣八郎と「対等の関係」にもどるためには、相手もそのことを認識することが必要なのである。

甚兵衛は考えた末に、「上意打」の「仕手」となったが、「恩」があるので、「申の刻迄に早急に国遠」<sup>こくえん</sup>すること——「遠国に出奔すること」（広辞苑）を勧めた書状を惣八郎に送った。しかし、惣八郎は「国遠」しなかった。甚兵衛に見事に介錯されて腹を切つたのである。

甚兵衛は「打ち落した首を見て居ると、憎悪の心がムラ／＼と湧いた。報恩の最後の機会を、惣八郎の為に無残に

も踏み蹂られたのだ」と思わざるを得なかった。また、「君命にも背かず、友誼をも忘れざる者と云ふので、甚兵衛は、一藩の賞め者となつた。そして殿から五十石の加増があつた。彼はその五十石を惣八郎から、受けた新しい恩として死ぬ迄苦悶の種」とすることになった。

甚兵衛は惣八郎に最後の最後まで「負け」たのである。そのうえ、惣八郎が死んでしまったために、「恩を返す」可能性はゼロとなり、彼自身の言葉通り、惣八郎は「一生恩人としての高い位置を占めて、黙々の裡に」、甚兵衛を「見下ろ」すことになつたのである。

作品は「天草陣惣八覚書と云ふ写本」から「今日計らずも甚兵衛の危急を助け申候、されど戦場の敵は私の敵に非ざれば、恩を施せしなど夢にも思ふべきに非ず、右後日の為に記し置候事。」という一節が紹介されて終っている。これは「大恩は謝せず」の重要さを説くためである。だが、同時に、惣八郎が「恩を返す」ことに取りつかれた甚兵衛を意識的に弄んでいる可能性を示唆している。他者を操作する悪意に満ちた小説世界の可能性が浮上してくる<sup>(8)</sup>。しかし、つねに「健全」な選択をしてきた作品の傾向からいえば、その可能性は低いだろう。それよりも注目したいのは、シミュレーションゲームとしての特徴である。

二人のプレイヤーが登場していたが、結局、甚兵衛の独り相撲になつていたことだ。命を救われた後で、惣八郎の陣中での様子から自分が「邪推」していたことを悟る場面があつたが、その後、甚兵衛が自己相対化をすることはなかった。惣八郎よりも「高い位置を占めて」「見下ろ」したいあまりに、対戦相手がどういふプレイヤーなのかを客観的に分析していなかつた。自分と同じ欲望をもつたプレイヤーであると決めてかかつていたのである。しかし、「写本」が示唆したように惣八郎は「恩を施」したという意識をもっていなかつた、あるいは、もってほならないと意識していたのである。甚兵衛とは別のルールで動いているプレイヤーだったのである。このことに気づかなかつた

ことが甚兵衛の〈敗戦〉の主因といっているだろう。

甚兵衛は結局、自意識の堂々巡りの陥穽に捕らわれていたのである。そう考えたとき、浮かびあがってくる作品は「忠直卿行状記」である。〈負け〉続ける男をプレイヤーとした作品が「恩を返す話」だったとすれば、〈勝ち〉続けてきた男が陥った陥穽を描いたのが「忠直卿行状記」だからである。

## 3

「忠直卿行状記」で、忠直の転換点となったのは、家臣の「以前ほど、勝をお譲り致すのに、骨が折れなくなつたわ。」という発言を立聞くことよって、「槍術の大仕合」の勝利が仕組まれたもの、偽りだったのを知ったことにある。忠直は「今迄自分が立つて居つた人間としての最高の脚台あしだいから、引きずり下ろされて地上へ投げ出されたやうな、名状し難い衝撃ショックを受け」、「世の中が、急に頼りなくなつたやうな、今までの凡ての生活、自分の持つて居た凡ての誇が、悉く偽の土台の上に立つて居た事に気が付いたやうな淋しさに、ひし／＼と襲はれて」（二）しまう。

菊池は「貴族の息子を一人知つてゐた。周囲の人の阿諛追従に依り、人生に対する正当なる認識を妨げられてゐるこの貴族の息子の存在」（小説論各論 歴史小説論）から題材を得た、題材として誰でもよかつたと述べていた。確かに、誰にでも起こりうることである。実際、立聞きによって他者の本音を知って他者認識が一変し、ひいては自己と世界の関係がゆらぐ体験なら、菊池自身もしたことがあつた。<sup>(9)</sup>だが、執筆時の菊池のように社会的な地位がそれほど高くない者では、体験が個人的にいかにも衝撃的であつても、傷つけられた「誇」は他者の目から見れば大したものではない。むしろ、騒げば騒ぐほど滑稽なものとなつてしまう。

したがって、大阪夏の陣で武功を立てて、家康から「日本樊噲」と呼ばれて、自らの〈優秀性〉を確信している人物こそが主人公にふさわしかった。忠直クラスの「誇」をもって人物でなければいけなかったのである。その意味で、主人公が誰でもよかったわけではなかった。忠直だからこそのような煩悶が説得力をもつのである。

考へて見ると、忠直卿は今日の華々しい勝利の中でも、何処迄が本当で、何処からが嘘だか判らなくなった。否今日のみではない。生れて以来幾度試みた遊戯や仕合で、自分が占めた数限りのない勝利や、優越の中で、何れ丈が本物で何れ丈が嘘のものだか、判らなくなった。さう考へると、彼は心の中を掻きむしられるやうな、烈しい焦燥を感じた。彼とても、臣下の凡てから偽の勝利を奪つて居るのではない。否その中の多くの者には、正當に勝つて居るのだ。それなのに右近や左太夫などの不埒者の居る為に、自分の勝利が、凡て不純の色を帯びるに至つたのだと思ふと、彼は今右近と左太夫とに対して旺然たる憎悪を感じ始めたのである。

が、夫ばかりではなかった。かうなると、つい三月ばかり前に、大阪の戦場に立てた偉勳さへ、何だか怪しげな正体の判らぬものゝやうに、忠直卿の心の中に思はれた。彼が、今まで誇として居た日本樊噲と云ふ呼称さへ、何だか人を馬鹿にしたやうな、誇張を伴うて居るやうにさへ思はれ出した。家臣どもからいゝ加減に扱はれて居た自分は、お祖父様からも手輕に、操られて居るのではないかと思ふと、忠直卿の眸には、初めて不覺の涙が滲じみ始めた。(一一)

忠直が〈勝ち負け〉に単純にこだわるところから、どの〈勝ち〉が「本物」なのか特定できなくなつて、「自分の勝利が、凡て不純の色を帯び」はじめたことを嫌悪するようになったことが注目される。つまり、白か黒か、明確な二分法の世界に生きていた忠直は、灰色の、「不純」な世界に引きずり込まれたのである。彼は〈純粹〉な世界へ復帰しようと試みる。忠直は「偽りの勝利」ではなく、「自分の眞の力量」を知るために、真槍での仕合を家臣に要

求する。

忠直は「自分の本当の力量を、如実にさへ知ることが出来れば、思ひ残すことはないときさへ、思込」む（三二）。しかし、家臣の方は、当然のことながら、主君と真剣勝負をすることはできない。逆臣となって謀反を起こす気のない彼らは負けるしかない。いってみれば、忠直はゲームのルールを一方的に変更したのである。したがって、対戦プレイヤーがルール変更に対応できなくても致し方なかった。

しかし、忠直はこう考えている。「自分と彼等との間には、虚偽の膜が、かゝつて居る。その膜を、その偽の膜を彼等は必死になつて支へて居るのだ。その偽は、浮ついた偽でなく、必死の懸命の偽である。忠直卿は、今日真槍を以て、その偽の膜を必死になつて、突き破らうとしたのだが、その破れは彼等の血に依つて忽ち修繕されてしまった。自分と家来との間には、依然としてその膜がかゝつて居る。その膜の向うでは、人間が人間らしく本当に交際して居るが、彼等が一旦自分に向ふとなると、皆その膜を頭から被ぶつて居る。忠直卿は自分一人、膜の此方に、取残されて居ることを思ひ出すと焦々した淋しさが、猛然として自分の心身を襲つて来るのを覚えた」。

忠直は〈勝利〉の真偽から、「人間らしい」「交際」の獲得へと、追求する問題を発展させている。いってみれば、忠直が、突然一人だけ、〈近代人〉として目覚めて、どんな「人間」でも対等な存在として社会的に交流するべきであると主張し出したことになるだろう。「虚偽の膜」は封建制度ということになるのだろうか。

しかし、冷静に考えれば、「膜の向う」でも封建制度が機能しているはずで、忠直に対するのと同じメカニズムが家臣相互にも働いていることが想定される。家臣の間にも「虚偽の膜」が存在していることは火を見るよりも明らかだろう。江戸時代に「人間らしい」「人間」が無前提に存在するはずはなかった。菊池が、新潮文庫の「解説」のとおり、時代に先駆けて、封建制度批判をしていたとしても、制度を制度として認識していなかったことは明らかであ

る。

作品では、「第一の寵臣である増田勘之介」が示した「親しみ」や、「老家老の小山丹後」の誠心から出た発言を素直に受けとめられずに、「癩癖」を起こし打擲して、彼らを死に追いやる忠直の姿が描かれていた。語り手は「家臣の一挙一動は、凡て一色にしか映らなくなつて居た」(四)と説明している<sup>(10)</sup>。

忠直は家老たちの建言を無視するようになるが、それは「凡てを僻んで解釈」(五)するようになったからだ。もっとも建言であっても、「家老達の云ふ儘になるのが不快」だから退けるだけで、「何の為に拒んだのか、彼自身にさへ分らなかつた」(五)のである。結局、問題は忠直の自意識にあった。彼が他者の言動に関する解釈を見直せば、事態は好転するはずなのだが、忠直は〈近代人〉としての自意識によって、他者を疑い孤独をつのらせていくのである。

他者の「不純」を疑う眼差しは公の空間だけでなく、プライベートな空間にも及んでいく。宴席で寵愛していた美女が「うつらうつらと仮睡に落ちよう」とする様を見て、忠直は「新しい疑惑に囚われ」た。「大金で退引ならず身を購はれ、国主と云ふ大権力者の前に引き据ゑられ」ただけで、「自分に愛がある」わけではないことに気が付いたのである。そして、「今迄自分を心から愛した女が一人でもあつた」ことはなく、<sup>(11)</sup>それどころか、「今迄、人間同志の人情を少しも味はずに來た事」(五)を自覚する。

考えれば、忠直に「友人」はいなかった。忠直が「同年輩の小姓」を「愛し」ても、「彼等は決してその主君を愛し返しはしなかつた。たゞ義務感情から服従した丈」だった。同様に、異性も忠直の「愛」に「愛」で答えたわけがなく、「唯々として服従を提供した丈」だった。忠直は「恋愛の代用としても、服従を受け、友情の代りにも服従を受け、親切の代りにも服従を受けて居た。」(五)と結論せざるを得なくなつた。

しかし、語り手が「その中には人情から動いて居る本当の恋愛もあり、友情もあり、純な親切もあつたかも知れなかつた。が、忠直卿の今の心持から見れば、夫が混沌として一様に、服従の二字によつて掩はれて見える。」(五)と的確に指摘しているように、問題は〈純粹〉さを求める忠直の「今の心持」、自意識にあつた。「不純」を嫌悪せず、一定の確率で「本当」が存在することを信ずれば事態は好転するはずだ。しかし、忠直は〈純粹〉さを求めてしまう語り手は「人情の世界から一段高い処に、放り上げられ、大勢の臣下の中央に在りながら、索莫たる孤独を感じて居るのが、わが忠直卿であつた。」と、忠直の陥つた「孤独地獄」(六)を説明している。<sup>(12)</sup>

「孤独地獄」からの脱出を図つて、忠直が選んだ戦略は、「彼を、心から愛し返さなくてもいゝから、せめては人間らしく反抗を示すやうな異性」(五)を発見して愛することだつた。これは家臣たちを新しいゲームに強制的に参加させることでもあつた。

つまり、家臣たちの「義務や服従」によつて作り出された「虚偽の膜」を破るためには、プレイヤーの従っているルールを自発的に破らせるように仕向ける必要があるというわけだ。その場合、家臣はアイデンティティ形成の基盤となつていた「義務や服従」を自発的に棄てなければならないというジレンマに直面することになる。また、主君と「人間」として「交際」するといつても、主君はもともと家臣と「人間」として接してきたわけではなかつたはずだ。にもかかわらず、突然、「人間らしく交際」することを強要されたのである。

そのうえ、「人間らしさ」は主君に対する「反抗」でなければならなかつた。家康の孫に「反抗」すれば、結局、幕府に対する「反抗」となつてしまう。〈近代的な人間観〉に目覚めた一大名が取つた戦略は、家臣たちに幕藩体制を無理矢理転覆させようとする倒錯したものでつたのである。

当然ではあるが、忠直の期待通りの女性は現われなかつた。最初は「高祿の士の娘」、次に「許婚いひなづの夫のある娘」

を物色しても、彼女たちは「何の反抗を示さずに忍従し」てしまう。そこで、「家中の女房で艶名のある」三名を「城中に召し寄せたまゝ、帰さ」ないという暴挙に出た。

そのうち二人の家臣は割腹してしまう。残る一人の浅水与四郎は忠直に「お目通り」を願ひ出る。忠直の前に現われた与四郎は「病犬のやうに呆け」「色が蒼ざめて、顔中に何処となく殺氣が漂つて居」(五)た。

忠直は「生来初めて、自分の目の前に、自分の家臣が本当の感情を隠さず、顔に現はして居るのを見た」、「主従の境を隔つる膜が除れて、たゞ人間同志として、向ひ合つて居るやうに思はれた」。与四郎は「殿！ 主従の道も人倫の大道よりは、小事で御座るぞ。妻を奪はれましたお恨み、かくの如く申上げまするぞ。」と述べ、「匕首」をもって忠直に襲いかかるが、忠直に「捻ぢ伏せられてしまつた」(五)。

忠直は与四郎の「反抗」にあつて「二重の歎び」を得た。「一つは、一個の人間として、他人から恨まれ殺されんとすることに依つて、初めて自分も人間の世界へ一足踏み入れる事が、許されたやうに覺えた事である。もう一つは、家中に於いて打物取つては、俊捷第一の噂ある与四郎が、必死の匕首を物の見事に、取押へた事であつた。此勝負に、嘘うそや佯よがりがあらうとは思へなかつた。彼は、久し振に勝利の快感を、何等の疑惑なしに、楽しむ事が出来た。忠直卿は、此頃から胸の裡に腐り付いて居る鬱懐の一端が解け始めて、朗かな光明を見たやうに思はれた」(五)。思い通りに、プレーヤーが行動したことを考慮すれば、ゲームの設計者としての「歎び」もあつたはずだ。

しかし、与四郎夫婦の自殺によつて、彼の「歎び」は長続きしなかつた。忠直は与四郎が刃向かつたのも「潔く、手刃されん為の手段に過ぎなかつたやうにも思はれた、若しさうだとすると、忠直卿が見事にその利腕を取つて捻ぢ倒したのも、紅白仕合に敵の大将を見事に敗つて居たのと、余り違つた訳のものではなかつた。さう考へると、忠直卿は再び暗澹たる絶望的な氣持に、陥つてしまつた」(五)。

その結果、忠直が「乱行」、「残虐」行為をつのらせることになったのは致し方ないように思われてくる。ここに最後の転換点があった。同時期の〈忠直もの〉は、忠直の「残虐」行為に重点をおいて描かれている。<sup>(13)</sup>しかし、菊池は転換後の忠直を描いて、犯罪小説・猟奇小説の方向に作品を進めなかった。谷崎潤一郎が「題材は好いが、俺なら三百枚に書く。」（「自信がなくて意外にも高評であった『忠直卿行状記』」）と嘯いたのも、ある意味で、自然だった。菊池は〈健全〉な選択をしたのである。

語り手は「忠直卿が、かゝる残虐を敢てしたのは、多分臣下が忠直卿を人間扱ひにしないので、忠直卿の方でも、おしまひに臣下を人間扱ひにしなくなつたのかも知れない。」（五）と最後に解説している。〈近代人〉として目覚めた忠直を描いている以上、作品を一貫させる当然のコメントのように思われる。

だが、語り手は、一方で、与四郎夫婦の自殺について「恐らく相伝の主君に刃を向けたのを、恥ぢたのと、かつは彼等の命を救つた忠直卿の寛仁大度に、感激した為であらう。」と説明していた。忠直は自殺という結果から遡って、与四郎の意図の「不純」度を測定していたのに対して、語り手は「咎」を与えなかつた忠直の態度に反応した結果として与四郎の行動を解釈していた。語り手は、忠直が他者を他者として把握できずに、自意識の堂々巡りの陥穽に囚われていることを示唆していたのである。

菊池は「忠直卿行状記」について、「貴族の息子」が「周囲の人の阿諛追従に依り、人生に対する正当なる認識を妨げられてゐる」（『小説論各論 歴史小説論』）ことから思いついた「テーマ」であると説明していた。しかし、「忠直卿行状記」で忠直を迷わせるのは「周囲の人の阿諛追従」ではなかつた。他の〈忠直もの〉では奸臣と悪女が忠直を迷わすが、「忠直卿行状記」で忠直を迷宮に誘いこむのは忠直自身だった。忠直は家臣のどんな言動も「阿諛追従」と解釈していた。忠直は自意識の自縛自縛の迷宮に囚われていたのである。「臣下が忠直卿を人間扱ひ」してもしな

くても、事態は変わらなかったはずである。

したがって、菊池自身が「私としては自信がなかった。十分書けてゐない気がした。」（「自信がなくて意外にも高評であった『忠直卿行状記』」）ともらしていたのは一理あった。家臣側に事態を悪化させた原因があるとして意味づけようとすると、作品に亀裂が走ることになるのである。

描かれた世界は、菊池自身の個人的な葛藤から生れた「恩を返す話」と共通している。対他関係の中での優劣に関する葛藤が出発点となっており、主人公は段階的にたてた戦略によって対他関係を逆転しようとしては失敗して、自分を孤独な状況に一層追いつめてしまう。しかも、その失敗を決定づけているのは主人公の解釈だった。その解釈の〈真偽〉は不明であるにもかかわらず、主人公は〈負け〉を自覚してしまっているのである。

菊池が描いていたのは、他者に〈勝ち〉たいにもかかわらず、〈負け〉を認めて、負のスパイラルに取りつかれやすい自意識の様相だった。菊池の作品にはこうした〈勝ち負け〉を、段階的に進行するゲームのように設定したものが散見される。例えば、「第一人者」（「中学世界」大6・11）、「ゼラール中尉」、「病人と健康者」（「帝国文学」大7・4）、「海の中にて」（「大観」大7・7）などが好例である。部分的に組み込まれた作品も含めれば、その例はもっと多くなる。菊池の作品世界のもっとも重要な特徴と考えていいと思われる。

その意味で、菊池のもとに横光利一がいたことや、大宰治が習作「地図」（「蜃気楼」大14・12）の下敷きに「忠直卿行状記」を使ったのは、ある種の必然と考えられる。菊池は自意識の葛藤を描く横光的、あるいは大宰的な世界の原型を描いていたからである。したがって、菊池の作品を昭和初期の新心理主義などに代表される潮流の源泉の一つとして位置づけることも可能だろう。

片山宏行は「偽りのロマンチズムのために目をくらまされ、真の現実の前に悲喜劇を繰り返す人間の愚かしさを

菊池は冷やかに描いた。大正七年までの諸作品、特に小説に共通するのは、幻滅から幻滅をへて真理にいたるというパターンであり、文学至上主義者を組上に載せた『無名作家の日記』（『中央公論』大7・7）はその典型であった。そうした菊池の透徹したまなざしは、マント事件によってもたらされたロマンティストとしての自身の挫折と苦悶の時代を経るなかで、バーナード・ショーの思想を介して獲得されたものであり、この時点で菊池は文字どおりのリアリストに変貌していたといえる。この大正七年までを、いわば菊池の文学精神史の第一期と考えておきたい。〔大正八年——安定と停滞——〕『菊池寛の航跡 初期文学精神の展開』和泉書院 平9・9刊）と整理している。

この整理に説得力があることは否定できないが、同時に「パターン」の中に潜在している新たな可能性を発見することも重要である。菊池自身が設定しようとした枠組も含めて、既成の評価軸を一旦相対化して、菊池の諸活動を新しい視点から意味づけていく作業も必要ではないだろうか。本稿ではそうした問題意識から考察を試みた。今後も継続して考察していきたい。

## 注

（1）新潮文庫の「注解」を担当した片山宏行は「高橋健二の『現代作家の回想』（昭63・5 小学館）によれば、この文章は菊池寛自身が本文庫初版（『忠直卿行状記』昭23・3）の解説として吉川英治の名を借りて書いたもので、いわば収録作品に対する菊池の自注・自解といえる。」と述べている。

（2）佐藤泉は「漱石のイメージに戦後社会の理念——民主的な社会や近代的な意識をもった主体という理想——が託され」と、「社会意識をもつこと、近代的な主体性を確立すること、自律的な個人となること、これは戦後の『精神革命』の課題だった。つまり、戦争中に軍部の暴走を許してしまったのは、国民が個人としての主体性を確立していなかったためだという反省がその動機となっていた。この文脈で、漱石が希有な近代意識の保持者としてシンボライズされた」ことを指摘した（『教

科書のなかの『漱石』像(1) 漱石、民主化』『漱石 片付かない〈近代〉』NHKライブラリー 平14・1刊)。菊池は漱石のようになりたかったといっているだろう。そのキャンペーン活動を始めた矢先に急死したのである。

(3) 有馬学「マルクス主義と歴史観」(第四章『非常時』の表と裏)『帝国の昭和』『日本の歴史』23 講談社 平14・10刊)を参照されたい。有馬は「講座派が提示したような、歴史に根拠をもつ日本社会(日本資本主義)の後進性というイメージが、多くの人に共有されたこと」の重要性を指摘していた。

(4) 「わが妻を語る」では、「僕の収入の三分ノ一か、四分ノ一位しか妻にやらない。」と述べているので、菊池は収入の三分の二から四分の三を使い切っていたのである。「菊池寛といふ男」(『文藝春秋』昭11・1)では、「僕の収入は、所得税が付加税を合せると、一日二十円以上に当るから、相当なものであらう。」と述べていた。所得税だけで七三〇〇円以上を収めていたことになる。菊池は巨額の収入の大部分を浪費していたのである。当時の実業家たちが大邸宅を建築し、茶道具を中心に美術品を購入したことに對比しながら、菊池が資産をほとんど形成しないで浪費したことの意味を新たに捉えていく必要があるだろう。

(5) 新潮文庫の「解説」でも、個々の作品の意味づけは「封建思想の打破」で統一し切れていなかった。「俊寛」で「菊池氏の逆説的抗議」と「ヒューマニストとしてのあたたかさ」を指摘したことぐらいだろう。

(6) 菊池寛の成瀬峰子への「生涯を通じて、感謝を以て思ひ出される」(『半自叙伝』『文藝春秋』昭4・11)という思いについては、片山宏行の『恩を返す話』成立の背景(『菊池寛随想』未知谷 平29・8刊)の整理を参照されたい。

(7) 代理ミュンヒハウゼン症候群とは、「母親が意図的に子供を病気にしたり、あるいは誤って病気だと訴える」「児童虐待」であるが、一九七二年から八五年にかけて自分の子ども八人を殺したアメリカのニューヨークスケネクタディのメアリー・テイニングのような極端な事例もある(ピーター・ヴロンスキー「怪物性の進化」『シリアルキラーズ プロファイリング』があまりにきらかにする異常殺人者たちの真実』青土社 平27・11刊)。

(8) こうした想像力は同時期に発表された他の作家の作品から読みとることができ。例えば、裏切った恋人と親友に復讐する男を描いた、有島武郎の「石にひしがれた雑草」(『太陽』大7・4)などが想起される。

(9) 菊池は高等師範学校時代の体験として、親友の心ない発言を立聞したことと傷ついた体験を「半自叙伝」(『文藝春秋』昭3・7)の中で語っていた。

(10) 忠直は狩りをした際に安らぎを得ていた。「人間の世界から離れ、かうした自然界に対する時、忠直卿は自分を囲ふ偽の膜から、身を脱出し得たやうに、すがくしい心持がした。」(四)とあった。ただし、忠直が単独で狩りをしているとは考えにくいので、ここでも忠直が嫌悪する「偽の膜」が働いていたはずである。

(11) 黒田日出男の『岩佐又兵衛と松平忠直 パトロンから迫る又兵衛絵巻の謎』(岩波現代全書 平29・6刊)によれば、忠直は、妻の、二代將軍秀忠の娘勝姫に対して大きな不満を抱いていた。また、忠直の好んだ武術は砲術(鉄砲)だった。

(12) 芥川龍之介の「孤独地獄」(「新思潮」大5・4 初出時は「紺珠十篇」という大見出しに「一 孤独地獄」の題で掲載された)の引用である可能性が高い。

(13) 例えば、渡辺霞亭の「水戸黄門 一国女の巻」(大阪朝日新聞 大6・4・16〜7・5 『水戸黄門』後編 大鑑閣 大6・10刊)では、忠直に残酷な行為をさせる切っ掛けとなった「一国女」は「世の事柄と周囲の人間とを自分の思ふ儘に働かせやうとする欲望」と、「紅い血汐を見る事」で心が慰められる「一種の病的特質」(六〇)の持主と設定されていた。まさに、谷崎好みの設定だった。